音楽を通した子どもの自己実現の場の拡充

～エル・システマジャパンの活動から～

31551260
法学部政治学科４年Ｄ組
塩原良和研究会９期
今井　絢梨

目次

１．　序論

２．　音楽の力の定義

　２−１．相互行為のなかで意味付けられる音楽

　２−２．コミュニティとしての音楽

　２−３．コミュニティのなかの相互行為としての音楽

　２−４．音楽の媒介性

３．　エル・システマの活動

　３−１．ベネズエラのエル・システマ

　　３−１−１．エル・システマの起源

　　３−１−２．エル・システマの効果

　３−２．日本のエル・システマ

　　３−２−１．エル・システマジャパンの起源

　　３−２−２．エル・システマジャパンの活動

　　３−２−３．エル・システマジャパンの特徴

　３−３．アメリカのエル・システマ

　　３−３−１．エル・システマ USA の誕生

　　３−３−２．エル・システマ USA の活動内容

　３−４．各国の活動の共通点

４．　インタビューの結果と考察

　４−１．日本とベネズエラの共通点と相違点

　４−２．活動から得られた効果

　４−３．今後の展望

５．　考察　〜相互行為、コミュニティ、その先へ〜

　５−１．人と人をつなげる力

　５−２．新たな行為を呼び起こす力

　５−３．自由な交流の場

６．　結論

１．序論

多くの人々が日々音楽に触れ、感動し、安堵し、また癒されているように、音楽には人々の心を揺さぶる効果がある。精神的に弱っている時や元気づけられたい時に音楽を聴くのは、無意識だったとしてもそうした効果を持つが故の行動なのである。私自身は約 14 年間演奏者として音楽に携わってきたが、そのなかで自分に生じた変化、学びは大きなものであった、さらに中村美亜は「音楽の意味や効果は、音楽そのものではなく、音楽と人間の関係の中で生まれてくるものだ」[1]と主張している。ここから、単に音楽そのものに癒される効果だけでなく、音楽と自分が関わることで生まれる効果があると仮説づけられる。そこで、音楽行為、演奏行為がもつ影響力について調査していたところ、エル・システマという南米、ベネズエラのオーケストラ教室の存在を知った。多くの子供が貧困に苦しむベネズエラにおいては、非行、犯罪に走る子供は少なくない。またそれは連鎖して次々と子供を巻き込む悪循環が存在している。そうした状況に変化をもたらしているのがオーケストラ活動である。エル・システマは子供達に無償で楽器を貸与し、指導することで、将来の選択肢を増やし、生きる目的やアイデンティティを自覚させ、希望を与えているのである。実際に多くのプロ奏者を輩出しており、音楽教育としての側面だけでなく、社会政策としても注目されている。また、最近は世界への広がりを見せており、南米に限らず全世界で実践されている現実がある。日本国内においてもエル・システマジャパンが設立され、東日本大震災からの復興を目的にオーケストラ活動が展開されているのである。本論の中で紹介するが、ベネズエラと日本のプロジェクトの違いは目的であり、芸術後進国であるベネズエラではオーケストラの発展が第一であり、副次的効果として非行に走る子供たちの矯正が挙げられているが、日本・福島県では震災で傷ついた子供たちに対して「生きる力を育む事業」を目的に掲げている。そこで本論文では、音楽の持つ社会的効果に焦点をあてるため、後者のエル・システマジャパンを取り上げ、事例研究を通し、音楽、特に集団でのオーケストラ活動が子どもにとって自己実現の場になる可能性について論ずる。第１章では先行研究を通じた音楽の力の解釈と定義、第2章では、事例としてエル・システマジャパンが取り組んでいる活動について、第3章では、それを踏まえたエル・システマジャパンの展望と演奏活動が子どもにとってどんな影響をもたらすのかについて、第 4 章では、エル・システマジャパンへのインタビュー結果と考察を述べることとする。

1 中村美亜『音楽をひらく』水声社、2013 年、18 頁

2. 音楽の力の定義

音楽には無数の形態や解釈が存在するが、本章は本論文で扱う音楽の解釈について述べることとする。

2−1.　相互行為のなかで意味付けられる音楽

序論にて、演奏するという面から見た音楽の影響に着目すると述べたが、具体的にそれはどういうことなのか。

音楽はなにやら不思議な力をもつモノだ、ということは古代から言われてきた。その力を外部刺激として捉え、その作用を利用したのが音楽療法だ。林庸二によると、音楽療法では、以下のように音楽を捉えており、音楽そのものが本質的にもつ効果を利用していることが読み取れる。

> セラピーの元々の意味である”medical treatment”の立場から音楽療法をみるならば、ここでの音楽は、身体的・生理的諸機能に影響を及ぼす外部刺激として用いられる。いわゆる「受動的音楽療法」における音楽であり、血圧、呼吸、脈拍、筋緊張、胃の働きなどの自律神経系や、脳波、免疫系、内分泌系などに及ぼす音楽の作用が活用される[2]。

しかし、こういった物理的に与えられる影響だけでは説明がつかない音楽が存在するのも事実だ。そこで序論でも述べたが、中村美亜は「音楽の意味や効果は、音楽そのものではなく、音楽と人間の関係の中で生まれてくるものだ」[3]と提唱している。音楽の与える影響を本質的に見出すのではなく、行為として捉えることで、個人の内面や社会環境に対しても影響を与える見方ができる。このように、音楽を行為として捉えることを提唱したのはクリストファー・スモールであり、それを「ミュージッキング　musicking」と呼んでいる。こうした考えは革新的であり、古来考えられてきた音楽の価値とはまったく異なるものである。 スモールによると、古来考えられてきた音楽の価値について、音楽学者は「音楽の本質およびその考えうるあらゆる意味は、音楽作品と呼ばれるモノのなかに見出されるということ」[4]を共通して主張しているという。音楽作品をモノとして仮定することで、「芸術に何らかの意味があるとして、それを知覚する者の意見

---

[2]林庸二「”Therapy”の語源から見た音楽療法」国立音楽大学研究所音楽療法研究部門編著『音楽療法の現在』人間と歴史社、2007 年、151 頁

[3] 中村前掲書、18 頁

[4] クリストファー・スモール著、野沢豊一・西島千尋訳『ミュージッキング　音楽は行為である』水声社、2011 年、22 頁

など関係ない。その意味は全て対象のなかに独立して存在する」[5]と考えられているのだ。こうした考えは、芸術のなかに価値は内在しており、さらにそれは誕生した時から不変であることを前提としている。スモールは、この理論がパフォーマンスを軽視している部分を批判しており、むしろパフォーマンスこそに音楽の価値が見出せると提唱していて、それを「ミュージッキング」と呼んでいるのである。さらに、以下のようにも述べている。

> ミュージッキングという行為は一連の「関係性」のなかで達成されるのであって、行為の意味はそれらいくつもの関係のなかにある。ミュージッキングの意味は、一般に思われているように組織化された音のなかにだけではなく、あらゆる立場でパフォーマンスに参加している人びと同士の関係のなかにも見つけられるはずだ。（中略）それらは人と人との結びつき、個人と社会との結びつき、人間と自然界、さらには超自然界との結びつきについてのものである[6]。

つまり、音楽を行為として捉えると、そこには様々な“関係”が大きく関わっている。このような関係が一つに統合されたのがシンフォニー・コンサートというひとつの儀式なのだ。この儀式の音楽的機能として、パフォーマンス以外の世界まで広がる関係のなかに実際に棲みこむことなくしてもその世界を経験できる「探究」、参与者同士にこれがわたしたちの関係性だと自覚させる「確認」、自分のアイデンティティを完全だと感じ、世界や自分の仲間たちとうまくいっているという感情を促進させるという意味で自分自身を「祝う」機能の 3 点を提示している[7]。このように儀式のなかには当該コミュニティの人々、または成立させるための行為の関係性が象徴化されているのである。

以上のスモールの議論から、音楽の力を解釈するにあたり、その音楽に内在する価値よりも音楽するといった行為に意味があると考えられる。さらに、行為のなかで構築されている関係性が儀式のなかで表されている、ということから、“音楽する”というのは一人での行為ではなく複数人間の相互行為であることが理解できる。なお、スモールは相互関係の範囲について、奏者に限らずそのパフォーマンスに関わっている全ての人、切符係やピアノの移動係や掃除夫をも含めるとしていた。本論文で対象とするこの相互関係の範囲については、次節で述べることとする。

---

[5] 同上書、23 頁
[6] 同上書、38 頁
[7] 同上書、344 頁

2−2.　コミュニティとしての音楽

前節では従来の音楽療法での音楽の概念を否定し、本論文では音楽を行為として捉えると述べたが、最近では音楽療法の捉え方も多様化してきている。そこで、ブリュンユルフ・スティーゲによる 3 つの音楽概念を紹介する。

第一に、「手段としての音楽」である。これは1節に述べた従来の音楽療法の方法に近く、「音楽が何かを刺激していく」「一方向の作用」[8]であるとしている。第二に、コミュニケーションにおける「媒体としての音楽」である。これはコミュニケーションに重点を置いており、「クライエントとセラピスト相互の関係が音楽が介在することによって変容していく」「双方向のコミュニケーション」[9]であり、第一に挙げたものとは異なる。従来、この二つが音楽療法界における中心的な考えであり、特にアメリカにおける医学的、行動主義的な音楽療法では第一の概念、ヨーロッパにおける心理的な音楽療法では第二の概念が主流になっていた。しかし、これらの捉え方は、中村によると「独善的になる危険性をはらむ」。

一方、第三の「コミュニティとしての音楽」という捉え方がある。音楽を「何かに参加することへの招待となる」と考えることで、「コミュニティに貢献できる可能性を与えて、そこに寄与することで還元される機会を与えるという意味」[10]を持っている。この捉え方は、従来の音楽療法の“悪いところを治す”という個人に焦点を当てたものだけでなく、コミュニティと接点を持たせることでその個人がどういう状態にいるかという環境をも視野に入れている。加えて、専門家と当事者というパターナリスティックな関係だけでない、同僚との関係が生じることが重要だ。中村は、このようなコミュニティとしての音楽を実践することによって「他者の存在を認め、他者を力づけると同時に、自分の存在を確認し、自分の生きる力を支えるという関係性を育む」[11]と述べている。

前節に述べた相互行為としての音楽では、その関係はパフォーマンスに関わる全ての人としていたが、本論文ではそれを「コミュニティの内部の人」との相互行為に限定したい。具体的にその「コミュニティ」とは、ともに演奏をする仲間で構成される団体で、指揮者含め全員が直接「演奏行為」に携わっているコミュニティ、とする。スモールの議論ではコンサートという1度のパフォーマンスに着目していたが、本論文での研究対象は継続することを前提としている複数人のコミュニティとする。それをつなぐものが音楽である場合、どのような機能を果たすのだろうか。コミュニティのなかで音楽をすることにより、そのコミュニティに帰属意識をもち、なんらかの還元をし得る。集団の中で、演奏する仲間とコミュニケーションを取りながらともに音楽を創る行為、その過程が個人に与える影響を考察したい。

---

[8] ブリュンユルフ・スティーゲ著、井上勢津・岡崎香奈訳「音楽療法とコミュニティ」ｉと同書、352 頁
[9] スモール前掲書、353 頁
[10] スモール前掲書、353 頁
[11] スモール前掲書、68 頁

2−3.　コミュニティのなかの相互行為としての音楽

では、コミュニティのなかで相互行為として意味付けられる音楽に的を絞ると、どのような効果がもたらされるのだろうか。まずは、この音楽の表すものについて掘り下げて考えることとする。本章第一節で述べた「相互行為としての音楽」は、音楽は演奏などの行為に価値があるとする考え方である。その関係性は、スモールが挙げているように掃除夫と奏者の関係すら重要な相互関係に含んでいて、それら同士が対等であるとはいいにくい。「コミュニティとしての音楽」は、自分が音楽コミュニティに携わることを指しており、自分自身が音楽を演奏するとは限らない。特定の音楽について聴いて語り合うコミュニティであってもよいとする考え方だ。しかし大事なのはそのコミュニティの構成員が平等であることだ。特にこの考えの所以となった音楽療法の世界での目的は、他者の存在を認めることで自分を認識することであった。これは、他者との関係が対等な同僚であることが前提にある。では、「相互行為としての音楽」と「コミュニティとしての音楽」の二つを組み合わせると、「対等な関係の中で音楽を演奏する」パターンとなる。それが当てはまる例としては複数人で演奏するアンサンブルもしくはオーケストラが挙げられる。そこで、「対等な関係の中で音楽を演奏する」行為が個人に与える影響について絞って調査を進めたい。

その前提の中で考えられる演奏行為の機能は、自己理解と他者理解である。スモールは以下のように述べている。

> どんな種類の音楽パフォーマンスでも、そこに参加する誰もが、自分たちに注意を払うすべての人に向かって、「これが私たちなのだ」と言っている。（中略）そうして表現された関係が好きになれないことも十分あり得るし、その意見を率直にいう権利だって私たちにはある[12]。

音楽パフォーマンスを行う過程の中で、他者との共同作業である以上、まず自分の解釈について演奏行為を通じて提示し、その上でそれを評価するという流れが必然的に生まれてくる。さらに、同僚関係である特性として、ピラミッド型の部活動などとはまた違う。互いにそれを認めあったり反発しあったりすることも自然であり、上下関係のない場では日常的に起き得ることなのである。したがって、同僚関係の存在するコミュニティで試行錯誤しながらも音楽を創るという行為は、自分を主張させ、他者を認める一連の流れを自然と行うことができるのである。

[12] スモール前掲書、394 頁

2−4.　音楽の媒介性

前述したように、スモールは音楽に内在する価値よりも行為の方が重要であると主張していた。そこで本節では、音楽に内在する価値とは何かを考え、スモールの主張を批判的に見つめ直す。

音楽の持つ力として注目したいのが、「媒介性」である。中村によると、音楽はメッセージを伝えるための媒体であると同時に、媒体（音楽）そのものもメッセージになっている。さらに、「媒体そのものがコンテンツとして機能しながらも、その意味はそれを媒介するものとの関係性において変化し、しかも、その媒体は、媒介するものの変質をも誘発する」[13]と述べている。つまり、コミュニティの中の自己と他者との関係性によって、音楽が持つ意味は異なるのだ。なお、音楽が媒介するものは、過去の自分と今の自分や演奏者と聴衆など、コミュニティ内の自分と他者に限らないが、前節で述べたように、ともに演奏する対等な関係性に焦点を絞っていく。また、音楽の持つ意味を決定させる要素について、中村は「①音による刺激、②外的環境、③内的状態の 3 つの変数によって決まる」と述べている。「『音による刺激』とは、物理的な意味でどのような音（もしくは音の連続体）であるかということ、『外的環境』とは、音の刺激がどのようなコンテクストで（どのような情報とともに）受容されるのかということ、『内的状態』とは、個々人の身体内の器官がどのように反応するようセットされているかということを意味する」[14]。これに基づくと、ともに演奏する仲間との関係性は演奏において大きな意味を持つことが理解できる。音楽を構成するコンテクストという意味では「外的環境」に相当するうえ、相手のことを自分がどう感じているかの緊張状態や心理的作用という意味では「内的状態」にも関係しているからである。これを踏まえると、「自己と他者との関係」が音楽を構成しており音楽の性質を変えうる要素になっているとともに、演奏によって「自己と他者との関係」も変わりうるという相互的な関係になっているのである。

以上で述べてきたように、音楽そのものには「媒介性」という性質がある。本節での議論を踏まえると、音楽は本質的に“媒介性”を持っていて、それをより活性化させるのが“行為”であるといえるのではないだろうか。行為によって初めて媒介性が生まれるのではなく、行為によっていかに潜んでいた力を引き出せるのかが決まるのだ。これより、音楽するという行為だけではなく、もともと内在する「媒介性」についても着目して研究をすすめてゆく。

13　中村美亜「東日本大震災と『音楽の力』」『アフターミュージッキング　実践する音楽』東京藝術大学出版会、2017、40 頁

14　同上書、41 頁

3. エル・システマの活動

本章では、前章で定義した音楽の力を実際に利用している事例として、福島県相馬市を第一拠点として行われているエル・システマジャパンの活動を挙げ、音楽が個人や社会に与えている影響について考察する。

3−1.　ベネズエラでのエル・システマ

日本での活動について論じる前に、活動の起源であるベネズエラの現状について述べ、エル・システマの基本理念や活動形態について理解する。

3−1−1.　エル・システマの起源

世界で初めてエル・システマが誕生したのは、南米ベネズエラであった。貧困、経済格差に苦しむベネズエラの地で、無料で子供たちに楽器を貸与し、無料で演奏技術を教えるオーケストラ教室だ。FESNOJIV（国立財団ベネズエラ児童青少年オーケストラシステム）によって運営されており、現在 20 万人以上の子供たちが参加している世界最大規模のオーケストラ教室である[15]。創始者はホセ・アントニオ・アブレウであり、そのもととなったのは1975年から始まったファン・ホセ・ランダエダ・ユース・オーケストラだ。当時、ベネズエラには芸術文化で国民全てを巻き込んだ運動がなかったため、アブレウはあくまでもベネズエラ人のみで構成されるオーケストラ作りにこだわった。というのは、石油資源に恵まれた国であったからこそ、裕福な一部の人間が享受できる一流の芸術文化は存在していたが、「裕福な一部の人間だけに享受されている限り、国のものにはならない」[16]と考えたからである。山田によれば、国民の中にもそのニーズは潜在的にあったという。

> 才能と気力が十分な若い演奏家が大勢いた。しかし、恒常的にプロとして活躍する場が整備されていないだけだったと創設メンバーたちはいう。実際、何らかの楽器を演奏することができる若者が、毎年ベネズエラ中央音楽大学に入学しようとして、試験を受けていた。定員80名の枠に、2000人以上の若者が試験を受けにやってくる年もあった[17]。

こうした状況であったため、オーケストラは驚くほど早く形になっていき、僅か2年で、拠点とし

---

[15] 山田真一『エル・システマ　音楽で貧困を救う南米ベネズエラの社会政策』教育評論社、2008 年、9 頁
[16] スティーゲ前掲書、101 頁
[17] スティーゲ前掲書、110 頁

ていたカラカス以外の地方においても活動を始めようという気運が出てきたのだった。アブレウ側としても、音楽教育という新たな分野で活動を始めることで政府からの援助が期待できると考えたため、クラシック音楽とは全く縁のなかった農業地帯においても拡大していくこととなった。

そうして広まっていく中で新たに生じた問題が生じた。第一に、音楽教育システムの必要性である。音楽文化が根付いていない地方では、初心者や幼少の子どもたちに教える必要があった。しかし、そこでの子どもたちは「練習時間には遅れる、遅れたことを悪いとも思わない、人が演奏している横で声をあげたり、走りまわったりする、ガムを噛みながら楽器を弾く」[18]などとても教育ができない状態であった。そこで指導にあたったのが、日本人ヴァイオリニストの小林武史である。1979 年 6 月に、ベネズエラ政府文化庁から日本政府への要請により、国際交流基金文化使節としてベネズエラに渡ることとなった。小林はヴァイオリンを見たこともない子どもたちに対し、挨拶をきちんとさせることから始まり、日本のスズキ・メソードと呼ばれる音楽教育法を用いて指導をした。スズキ・メソードとは、「母語教育法」という方法で、まず演奏を繰り返し聴き、それを何度も真似をして理解させ、最終的に自分でその内容を応用して演奏できるようにするといった内容のものだ[19]。このスズキ・メソードを導入してからというもの、音楽教室として本格的に機能させることが可能となった。

第二に、同時に生じた問題の楽器不足についてである。数人でのシェアや、中古などの寄付ですら間に合わなくなってしまった。ベネズエラ国内での寄付にとどまらず、UNESCO や世界各国に向けて寄付の要請をしたものの、慢性的な楽器不足に陥ってしまう。そこで、FESNOJIV は自ら楽器工房を設立することを決めた。これはルシエール・センターと呼ばれ、のちに楽器職人の養成所としても機能するようになった。UNESCO による職人派遣などの支援を受け、現在では国内に 7 箇所設立されている。

このような経緯を経て完成した現状の組織体系は、音楽教室とオーケストラから成るものだ。音楽教室は、「2 歳と半年程度から就学前の幼児クラス、小学生と一部中学生による児童クラス、中高生による青少年クラス」と年齢別の3クラスに分かれている。このような音楽教室で学び、さらに7歳以下は就学児童前オーケストラ、ついで児童オーケストラ、青少年オーケストラに所属することになっている。青少年オーケストラを卒業する、もしくはオーディションに受かると、各地域のプロ・オーケストラに参加することが認められる[20]。 こうして、アブレウが創始当時から目指していた、ベネズエラ人のみによるオーケストラが実現したのだった。

---

[18] スティーグ前掲書、134 頁
[19] 才能教育研究会「スズキ・メソードとは」2017 年 7 月 31 日閲覧
＜http://www.suzukimethod.or.jp/about/native/＞
[20] スティーグ前掲書、159 頁

3−1−2.　エル・システマの効果

では、実際にエル・システマはどのような功績をあげているのだろうか。効果として、ハイレベルの音楽教育と犯罪防止の2つが挙げられる。第一に音楽教育については、ユース・オーケストラ育成機関としての実績がある。シモン・ボリバル・ユース・オーケストラはエル・システマの生徒から全国選抜されたオーケストラである。ザルツブルグなどの著名な音楽祭にも出演している実力がある。世界ツアーも毎年行っており、一度に訪れる都市は多い時に 10 を超えるほどだ。山田によると、「アメリカの大都市では日本のプロに匹敵する演奏水準の青少年オーケストラも少なくない」ものの、「シモン・ボリバル・ユース・オーケストラがここまで世界で旋風を起こしているのは、その規模が大きいことにある」[21]という。その規模の大きさの所以は、無料で楽器を与え、無料でレッスンを提供するため生徒の母数が多く、メンバーの入れ替え試験が頻繁に行われており生徒間の競争意識が高いからなのだ。

次に犯罪防止についてである。ベネズエラは貧困と格差が極めて深刻な社会だ。IEP（経済・平和研究所）の発表している平和度指数は治安状況、内戦・国際紛争の発生状況、軍事化のカテゴリーに基づいて平和の度合いを示しているもので、軍事強化など平和維持への不安要素が大きいほど数値は大きくなる。これを用いて比較してみると、2017 年の平和度指数は 2652 と日本の約 2 倍であり、世界 143 位という結果だ[22]。そのような貧困や犯罪が蔓延する社会で、エル・システマが行われている教室・学校は、鉄格子によって守られている。放課後何もやることがない子どもが非行に走ったり、犯罪に巻き込まれたりする代わりに、楽器を習わせることで、将来への道を開いたり、規律を学ぶことができるのである。現在では、刑務所や犯罪矯正院の中でも活動が実施されており、犯罪から守るだけでなく矯正する可能性も示している。その例として、青少年犯罪矯正院での取り組みがある。以前の大統領であるウーゴ・チャベス大統領が行った監獄の改革の一環として、実験的にオーケストラ活動が取り入れられた。監獄内は外にも増して危険であり、囚人の 4 分の 1 程度が獄内で殺されている。一度暴力の悪循環にはまってしまった場合、暴力以外に価値のあるものを収容者に教えることが最も有効だ。山田は以下のように述べている。

> 囚人には、それぞれの人生の苦しみがある。誰もが好んで罪を犯しているわけではない。演奏しながら、囚人プレーヤーの中に、涙を浮かべたり、流したりする者も珍しくない。芸術には、もともと、カタルシスの機能がある。自分の感情が芸術と同化したとき、苦しみや、

---

[21] 山田真一『貧困社会から生まれた奇跡の指揮者　グスターボ・ドゥダメルとベネズエラの挑戦』ヤマハミュージックメディア、2011 年、126-127 頁

[22] Institute Economics & Peace *Global Peace Index 2017,* 2017 年 7 月 31 日閲覧
＜http://visionofhumanity.org/app/uploads/2017/06/GPI17-Report.pdf＞

悲しみも、洗い流される[23]。

このように、囚人に音楽を触れさせることで、暴力以外の手段を提示して将来への道を開けさせる、といった効果も存在しているのである。

ひとつ、山田真一が注意とすべきだとしているのが、プロジェクトの目的はあくまでもベネズエラ人によるオーケストラを作るということであり、それは犯罪から更生した青少年だけによるオーケストラではないということだ[24]。犯罪矯正院の中でも行われているのは事実だが、プロに評価され世界ツアーを毎年行えるレベルまで達するのには幼少期から教室に通う必要があり、犯罪矯正はあくまでも副次的効果であることを強調しておく。

3−2. 日本のエル・システマ

前節では起源の地であるベネズエラでのエル・システマの活動について述べたが、現在この活動は、アメリカをはじめヨーロッパなど世界 30 カ国以上へ広がっている。日本にも 2012 年に導入された。そこで本節では日本でのエル・システマについて、ベネズエラのものとの共通点、相違点に着目しながら分析していく。

3−2−1. エル・システマジャパンの起源

同組織は、2012 年 3 月に福島県相馬市との協定により設立された。設立者である菊川穣氏は、ユネスコ、ユニセフの職員として通算 9 年間、子供たちを暴力から守り、教育・保護・公衆衛生プログラムに携わっていた。2008 年に日本ユニセフ協会に入り、この頃にエル・システマの存在を知ったという。この頃の心情について、「素晴らしい仕組みに感動し、興味はあったが、日本のように経済的に豊かで音楽教育が盛んな国では、社会運動としての音楽教育は難しいのではないかと思っていた」[25]と述べている。そんな思いを変え、設立を決心したきっかけは、東日本大震災であった。当時日本ユニセフ協会の緊急支援本部のチーフコーディネーターとして、震災直後から現地に入っていた菊川氏は、ライフラインが復旧し、学校が再開された後の支援について悩んでいた。10 歳前後の子供にとって、放射能の危険が指摘されながらも、自信と誇りを持って土地から切り離されることなく生きて行く仕組みがなければ、被災地も子供達の将来も守れない、と考えたのである。そこで取り入れたのがエル・システマである。ベルリン・フィル・ハーモニー管弦楽団のホルン奏者であるフォーガス・マクウィリアム氏から、エル・シ

---

[23] 山田真一『エル・システマ　音楽で貧困を救うベネズエラの社会政策』前掲書、257 頁
[24] 同上書、10 頁
[25] トリシア・タンストール著、原賀真紀子訳『世界でいちばん貧しくて美しいオーケストラ』東洋経済新報社、2013 年、270 頁

ステマは国や地域によってあるべき姿や役割は様々であり、変容しながら拡大していると聞いた菊川氏は、被災地の復興という視点でこの活動に挑戦する意義を感じ、設立に踏み切ったのであった。

設立にあたり、まず福島県の相馬市教育委員会と協力し具体的な形にするための会議を行った。相馬市を選んだ理由として、菊川氏が以前行ったユニセフ支援の写真ワークショップにて子供達が芸術によって変えられていく姿を目の当たりにしており、その際に芸術の力を実感していたこと、また、関係者の「自分たちの地域は自分たちで作る」といった自立心が強かったことの二つがあったからだ、と語る[26]。掲げたビジョンは、「日本中の子どもたちが音楽をはじめとする様々な芸術での経験を通して、自分自身とそのまわりの社会環境に誇りと自信を持ち、人生を有意義におくれるような支援を展開する」というもので、ミッションとしては「音楽をはじめとする芸術活動を通した、子どもの自己実現の場の拡充を推進する。困難な立場にある子どもたちが参加できる子どもオーケストラを設立し、その活動を通して、子どもたちがより積極的に自己実現をはかり、社会のための行動を起こせるような環境を整備する」[27]と設定した。

具体的なシステムとしては、ベネズエラとは違って運営主体はあくまでも現地の学校に置き、エル・システマジャパンがそこに必要な楽器を提供し、音楽講師を無料で派遣する形態にした。また、教育委員会という公的な組織を基盤としたことで、復興関連予算として文部科学省からの補助金も確保できた。楽器の手配や修繕、各種研修などの実施に関しても、個人や企業、団体からの支援の目処が立っているという。平成29年度の予算を見ると、相馬市、文化庁、駒ヶ根市、ふるさと納税、東京芸術劇場、民間からの受取助成金を合計して 23,976,000 円、寄付金を合計して、61,406,800 円となっている[28]。他の収益源は正会員、賛助会員の会費が挙げられるが、寄付と受取助成金の合計が占める全収益の割合は、約77.2%であり、収益源のほとんどが助成金と寄付であることが分かる。

3−2−2. エル・システマジャパンの活動

本項では、実際のエル・システマジャパンの活動内容について述べる。現在、活動は福島県相馬市、岩手県大槌市、長野県駒ヶ根市の三箇所を主な軸として行っている。各地で子どもオーケストラ、またコーラスが組織されており、場所によっては作曲教室や体験教室なども実施されている。最初に導入された場所である相馬では、小学校への楽器・指導の支援から開始され、現在では週末弦楽教室の活動まで広げられた。エル・システマジャパン公式ホームペ

---

26 同上書、272頁

27 一般社団法人エル・システマジャパン「ビジョンとミッション」2017年9月24日閲覧＜http://www.elsistemajapan.org/vision＞

28 一般社団法人エル・システマジャパン「平成29年度予算」2017年9月24日閲覧＜http://docs.wixstatic.com/ugd/efc3d0_557c75f2ad6548d7a3835087621ee089.pdf＞

ージによると、年代は未就学児から高校生まで幅広く、約 90 人もの子どもたちが日々練習に参加している。学校を通じた支援で言えば、部活動や音楽授業の支援、専門家の派遣などが行われており、その他楽器の購入や修繕も行って[29]いて、公演も相馬市内の市民館にて定期的にされている。また 2015 年 3 月には、ベネズエラのエル・システマ出身で現在はプロの指揮者であるグスターボ・ドゥダメル氏率いるロサンゼルスのユース・オーケストラ、YOLA との共演も実現した。さらに、もともと寄付を受けていたベルリン日独センターからの招待を受け、2016 年 3 月にはドイツ公演ツアーも敢行された。このように、活動の幅は日本にとどまらず、海外交流にまで及んでいるのが最近の動向である。

また、相馬市立桜ヶ丘中学校校長である村田権一氏は、「東日本大震災で漁業、農業といった第一次産業が壊滅してしまったなか、子どもたちがどのように将来目標を設定できるかが課題だった。エル・システマジャパンの活動を通じて、子どもたちは音楽家、音楽の先生、ディレクター、市役所職員などに出会い、自分の将来を考えるきっかけを見出した。震災や津波による PTSD 対策だけではなく、キャリア教育になっている」[30]と述べており、活動を通じて将来への道も切り開くきっかけとなっていることが分かる。さらに、エル・システマジャパン大槌コーディネーターである臺隆明氏も、「大槌町には震災を境に外からの文化が入ってきた。いろいろな支援が展開したが、それも次第に減り、住民は風化を実感している。子どもたちを取り巻く環境はまだまだ復興途上で、日々動いている。しかし、音楽は必ずいつもそこにある。エル・システマジャパンの活動は、子どもたちにとって『いつでも来ていい』という居場所になっている」[31]と述べていることから、音楽そのものが子供達に影響を及ぼしているだけでなく、エル・システマという場そのものが安心をもたらしていることも理解できる。

3−2−3. エル・システマジャパンの特徴

設立について述べるにあたり重要な点は、増田ユリヤが「菊川さんが相馬でエル・システマをスタートさせたとき、ベネズエラのやり方をそのまま被災地に導入したわけではなかった……そこが面白いと思うんです」[32]と述べていたように、ベネズエラのものをそのまま輸入したのではなく、日本で適応しうる形に変容させたことである。そもそも創始者のアブレウは、エル・システマを“そこにはあるけれど、まだ形はないもの”としており、決まったルールもライセンスも存在して

---

29 一般社団法人エル・システマジャパン「相馬子どもオーケストラ＆コーラス」2017 年 12 月 21 日閲覧 ＜http://www.elsistemajapan.org/soma>

30 一般社団法人エル・システマジャパン「外部評価調査」2017 年 12 月 21 日閲覧＜http://www.elsistemajapan.org/evaluation＞

31 同上

32菊川穣、増田ユリヤ「対談 音楽で被災地の子供を支える『エル・システマ』。」『潮 2017 年 4 月号』潮出版社、2017 年、37 頁

いないのである。これについて、菊川氏は以下のように述べている。

> 私たちの活動は、ベネズエラのように、貧困家庭の子どもだけを対象にしているわけではない。では、何をもって、このエル・システマが公益に適うといえるのか。それは、「オーケストラや合唱に参加する機会」をどんな子どもたちにも平等に提供することだと思います[33]。

つまり、当時の被災地で求められていたことは子どもたちの心の傷を癒すことであり、その目的に合わせてシステムを形作った。ベネズエラでは、音楽文化を構築することが一つの目的であったため、ある程度「正確に演奏する」ということも一つの大きな目標としていたが、子供たちの心の傷を癒すことを目的とする日本では、第一に「楽しむ」ことを掲げているのが特徴だ。

また菊川氏がこだわった点としては、子ども同士で教えあうというシステムを残したことだ。先輩が後輩に教える、といういわゆるピラミッド型の体制ではなく、もっと広くて緩い縦のつながりが生まれているのである。「いまは車社会の到来で、田舎でも皆が集まる場がなくなり、地域が分断されてい」るため、こういった広い年代が自然と集まる場は希少だ。また前述したように“楽しむ”ことを掲げていることから、音楽性そのものを高めると同時に音楽により人と人がつながれる力をより重視していて、その可能性を期待していることが理解できる。

3−3. アメリカでのエル・システマ

内藤るみによると、アメリカでは「現在類似プロジェクトを含め 60 箇所、ほぼ全ての州に最低ひとつのエル・システマ関連プロジェクトが存在する」[34]。本節では、そのひとつであるロサンゼルスのプロジェクトについて述べる。

3−3−1. エル・システマ USA の誕生

アメリカのロサンゼルス・フィルハーモニックにはYOLAと呼ばれるユース・オーケストラがある。ここでは、ベネズエラのエル・システマ出身で世界的に活躍する指揮者であるグスターボ・ドゥダメルが音楽監督を務めている。ドゥダメルはトロンボーン奏者の父と声楽家の母の間に生まれて幼い頃から音楽に親しんでおり、5歳の頃からエル・システマに参加していた。その経験を生かして、「エル・システマの応用プログラムをトレーニングの柱とし、ロサンゼルス・エリアに将来複数の地域主導によるユース・オーケストラを作る『ユース・オーケストラ・ロサンゼルス構想』

---

[33] 同上

[34] 内藤るみ「世界に広がるエル・システマムーブメント」『音楽の友 2011 年 4 月号』音楽之友社、2011 年、11 頁

に着手した」[35]。さらにこの動きから派生して、アメリカ最古の音楽専門大学であるボストンのニューイングランド音楽院（以下、NEC）の先導で、2009 年に”エル・システマ USA”が立ち上げられたのである。NEC とベネズエラの FESNOJIV はフレンドシップ条約を結んでおり、連携しながらアメリカ向けに応用させたエル・システマを実用化させている。またベネズエラと類似した点としては、メキシコや韓国などから来た移民を中心に、生活に苦労する子どもたちに向けた音楽レッスンが行われていることが挙げられる。

3−3−2.　エル・システマ USA の活動内容

具体的なエル・システマ USA の特徴として、“ピア・ラーニング”への取り組みと“ディレクター育成プログラム”の両方を行っている点が挙げられる。

第一にピア・ラーニングについてであるが、これは前述してきたエル・システマの特徴ともいえる、ピア（仲間）同士で教えあう文化のことである。ボストンのエル・システマ・ユースオーケストラの講師経験がある Maria del Pilar Zorro−Leyva は以下のように述べている。

> ピア（仲間）同士で学びあう風土をつくることは、エル・システマの背骨の一部を形成するようなものだといえる。私はアメリカでこのピア・ラーニングを確立することは、個人の能力、業績が重要視されるアメリカ社会においてもっとも達成が難しい課題だと思っている。（中略）年上の生徒は助っ人（ピア・ヘルパー）として、それぞれのオーケストラの特色やレベルを踏まえたうえで年下のメンバーを手伝い、また彼らの知識を年下の子どもにどう教えるかを学んでおり、それが結果としてオーケストラ全体を助けることになっている。[36]

つまりベネズエラや日本と同じように子供たち同士で教えあうというシステムを確立しており、それがアメリカの子供たちにとって最も重要な意味を持っているのだ。お互いを助けあうことや、みんなで何かを達成するということはアメリカの教育に浸透していないのである。

第二に、アメリカ独自のシステムとして、応用プログラムを遂行するためのリーダーを育成する“アブレウ・フェローズ・プログラム”がある。内藤は、これについて以下のように述べている。

> 各年 10 名の音楽家を選抜、1 年の集中トレーニング（フェローシップ）を提供、修了後彼らは全国の関連プロジェクトでディレクターとして稼働する。ここで養成する音楽家の定義は

---

35 同上

36 Maria del Pilar Zorro-Leyva「エル・システマのピア・ラーニング（ボストンでの取り組み事例）」2018 年＜http://www.elsistemajapan.org/single-post/2018/10/11/エル・システマのピア・ラーニング（ボストンでの取り組み事例）＞

「新しいタイプの人材ー地域市民であり芸術家である若い指導者ー」と同時に「21 世紀型の音楽家ー急変し続ける現代社会に柔軟に対応でき、地域社会リーダーになれる起業家精神溢れる音楽家」である。[37]

つまり、子供たち同士では補いきれない指導者不足について、日本やベネズエラのようにボランティアや卒業生ではなく、ディレクターとしての人材育成にも力を入れていることが理解できる。

3−4. 各国の活動の共通点

本節で述べたように、エル・システマはその国固有の環境や問題に合わせて目的や形態を変容させており、決まったルールはないとされている。このような相違点や共通点を、2-4 で述べた媒介性の考察と結びつけて考える。共通点として挙げられる点は、日本をはじめとする各国がエル・システマを採用し、国をあげたプロジェクトとして取り組んでいる理由として、音楽を通して協調性、人と繋がる力の創出を期待しているからである。音楽というコンテンツに注目されている理由は、本質的に持つ“媒介性”にある。さらにオーケストラという形態をとり、周囲とコミュニケーションをとりながら「音楽を行為する」ことで媒介性が活性化されていると言える。その反面、各国で違っているのは、“自己と他者を繋げた先で何を期待しているのか”である。例えばベネズエラでは協調性を育むという効果があったように、“他者と調和することの大切さを知る”ことが期待されている。一方で、日本では、子供達の将来を考えるきっかけを見出した効果があったが、これは“他者と関わることで自己を客観的に見る”ことが期待されているのである。このように、効果や事業内容は国によって変容していて決まったルールがない中でも、“音楽の媒介性”が軸となっていると言えるのではないだろうか。さらに言えば、媒介性を軸とした活動を広めていけば、音楽行為の先にある目的は各国によって柔軟に変容させることが可能だと言うことができる。

---

37 同上

4. インタビューの結果と考察

今回の論文を作成するにあたり、エル・システマジャパンの代表理事である菊川穣氏にご協力いただき、2017 年 12 月 5 日に東京・神田にある事務所にて、お話を伺うことができた。本章では、インタビューで得られた結果をまとめ、考察していく。

4−1. 日本とベネズエラの共通点と相違点

前述したように、菊川氏がエル・システマを日本に導入した際に留意したのは、日本に適応する形に変容させたという点だ。そこで、ベネズエラのものと日本のものの共通点と相違点を伺った。まず共通点については、高い芸術性へのこだわりだ。ベネズエラではアブレウの意向として、小さな子にも交響曲に触れさせるという方針があった。その所以としては、彼は作品自体に意味を見出していて、困った子にこそ質の高い音楽に触れさせることが必要であるという考えを持っていたのだ。そのため、幼い子供でも一流の交響曲を演奏できるよう簡易版の楽譜、少し難易度を上げた楽譜、フルバージョン、と楽譜をレベル別に用意した。これはスパイラル・カリキュラムと呼ばれていて、エル・システマにおいて重要なシステムの一つである。菊川氏はこの考えに共感していて、「一般的に考えたらできるだけ多くの子に参加してもらい、できるだけ高いレベルの音楽を求めるというのは矛盾しているが、それを両立させることがポイントだ」と述べていた。また、先進国である日本においても、全ての子供が質の高い音楽にアクセスできるわけではない現状についても述べていた。都市では様々な環境が整っているものの、地方においては音楽に触れる機会もごく少ないのは事実である。このように、ベネズエラと日本は環境の程度は異なるものの、質の高い音楽にこだわって追求することは両国で共通している。

次に、ベネズエラと日本の相違点については二点があげられた。第一に、日本の子供にはすでに協調性が備わっていることが多い、という点だ。そもそもベネズエラと日本で実施されている教育レベルは大きく異なるうえ、対象とする層についても、ベネズエラのように貧困ゆえに犯罪などの非行に走る子供達というわけではない。日本の小学校では仲間と協力して目標を達成するようなプログラムももともと実施されているうえ、日本人の特性として“協調性”があげられることも少なくない。となると、ベネズエラで大きな目的、効果として挙げられていたものは日本では通用しない。そこで菊川氏が考えた日本独自のニーズとは、「自由に交流できる場」であったという。3−2−3で述べたように、車社会の到来により集まる場所がなく、人とのつながりが分断されてしまった地域では、広い年代が関わりあう機会はない。その中でのエル・システマジャパンの位置付けとは、強制することなく幅広い年代と関わりあうことのできる交流の場、であるといえる。第二に、エル・システマで活動できる時間の差についてである。ベネズエラの小学校は基本的に午前中で終了してしまう。ゆえに、午後に何もすることのない子供たちが非

行に走ることが多くなるという問題があり、エル・システマの存在意義につながっていた。その反面、日本では学校は夕方まであるうえ部活や習い事で忙しく、なかなか来ることができない子も多いそうだ。ベネズエラと比較したら、どっぷりと音楽にばかり浸かる、またエル・システマ中心の生活にするということはできないが、続けていく中でうまく部活と両立していく子もいると述べていた。

以上のようにベネズエラとは環境が異なるため、高い芸術性を目指すという共通点はそのままに、日本での独自のあり方が築かれていったのである。

4−2. 活動から得られた効果

エル・システマジャパンの活動を通して得られた効果について、3−2−2で述べた基本的なもの以外について伺った。予想に反して得られた効果として最も大きかったのが、大人への影響であったという。最初は指導ボランティアとして携わっていた社会人や大学生の間でも演奏活動が展開されるようになったのだ。特に大槌ではシニア教室も開かれるようになり、子どもが音楽によって喜びを得る姿が大人にも影響を及ぼすようになった。菊川氏は、これを「少子高齢化が進む 21 世紀の日本独自のエル・システマ進化形」[38]と述べていて、教室の新たな可能性が示唆されている。さらに、相馬子どもオーケストラの YOLA との交流を通して子供達に起こった変化が、英語への興味だったという。アメリカ人の子供達と共に演奏することで、子供達は「同年代であるのにすばらしい技術を身につけ、楽しそうに演奏している姿も見て、とても刺激を受けました」「自分も楽しく演奏できるふしぎな力を持っていることに気づいてからは、心から楽しんで弾くことを意識するようになりました」[39]と感想を述べていた。このような感動と同時に、言語が通じないもどかしさもあったのではないかと菊川氏は述べる。その興味が直接将来につながるとは断言できないが、海外交流という機会を通じて、子供達の視野を広げたのは確かなことである。

4−3. 今後の展望

現在着々と活動の幅を広げているエル・システマジャパンだが、今後はどのように活動を展開していくのかについて伺った。2017 年 6 月にエル・システマジャパンの活動の一環として新しく始まった東京ホワイトハンドコーラスの活動は、今までと違ったアプローチで活動を展開している。対象となるのは、聴覚や発声に障害を持っている子や、自閉症の子供達だ。これはもともとベネズエラで生まれた合唱団で、歌と共に白い手袋をしたパフォーマンスを行うことから

38 一般社団法人エル・システマジャパン『2016 年度活動報告書』2017 年、2 頁
39 岩井光子『未来をはこぶオーケストラ　福島に奇跡を届けたエル・システマ』汐分社、2017 年、100 頁

このように名づけられた。都内のろう学校などで参加が募られ、幼稚園から高校生まで、幅広い年代の子どもが集まった。聴こえなくても振動が体全体に伝わることで音楽の素晴らしさがわかり、それを体全体で、自由な発想で繋いでゆくのが特色である。コーラスの指導を担当する井崎哲也氏が「日本にも、聴こえない人に合った音楽教育があるべきなのです」と話した[40]ことから分かるように、こういった取り組みは日本にはあまり普及しておらず、先進的な形なのである。菊川氏は、今後のエル・システマの展望として「誰でも参加できる仕組み」の意味を広げていくと述べた。貧困に苦しむ子、震災によって傷付いた子、楽器に興味がある子、音楽をしたくてもできない子――「誰でも」の対象は無限に広げることができる。東京ホワイトハンドコーラスはその先駆けとなる活動なのだ。

[40] T japan 「聴こえなくても、音楽を共に創り、表現し、みんなで楽しむ」2017年 ＜https://www.tjapan.jp/ART/white-hand-chorus-17＞2017年12月22日閲覧

5. 考察　～相互行為、コミュニティ、その先へ～

前述した研究結果とインタビューの結果を合わせて考察し、エル・システマジャパンが持っている効果や役割を、「人と人を繋げる力」、「新たな行為を呼び起こす力」、「自由な交流の場」に分けて述べる。

5−1. 人と人を繋げる力

こうしたインタビューの結果の内容を、第 1 章で述べた理論を参照しながら考察する。4−1−2，4−1−3に述べたように、“音楽によって人と人を繋げる力”が明らかとなった。具体的には一緒に演奏している子供同士、子供と指導員として携わっている大人、海外のユース・オーケストラの子供と相馬の子供など、一つにとどまらない関係性の広がりが確認できた。2−1でスモールの主張として、音楽という繋がりを介して、コミュニケーションを取りながら関係を築いていく「相互行為としての音楽」を紹介したが、それに重なるといえる。また生きる力を育む事業と掲げている事実や、犯罪矯正院で取り入れられて実際に効果を見せている事実から、自分のアイデンティティを確認しえる機能をも持っているのである。さらに「コミュニティとしての音楽」とは、ただ一方向のはたらきかけではなくパターナリスティックな関係でもない、対等な関係が生じることであったが、これは子供同士での教えあいや自由な交流によって築かれる特別な“同僚との関係”に示されている。年の差も経験年数もそこでは関係なく、まったく新しい関係を築くことができるようになっている。このように、エル・システマはすでに「相互行為としての音楽」「コミュニティとしての音楽」の両方の要素を持ち合わせている。つまり、本論文の研究対象としていた、集団の中で演奏する仲間とコミュニケーションを取りながら、共に音楽を創る行為はエル・システマに当てはまり、その効果も示された。

また、スモールの理論では、音楽を行為として捉え直した時点で、作品に内在する価値はほとんど重視していなかった。しかし、1−4で述べたように音楽作品には媒介性があり、それが演奏などの行為によって引き出されると仮説を立てた。そこで実際のエル・システマの活動に目を向けると、日本とベネズエラに共通して高い芸術性にこだわりを見せていた。以下は筆者による見解となるが、質の高い作品に拘っていた理由として「時間」と「難易度」の要素が挙げられる。練習曲や子供向けの楽曲は演奏時間が短いが、交響曲となれば 10 分から長いものでは 40 分と、子供にとってはかなりの長時間集中して演奏しなければならない。短時間では見いだすことができない、「他人と繋がった」という感覚も、長時間演奏し続けることによって徐々に周囲へと視野が広がって生まれるのではないだろうか。さらに、高い難易度の楽曲に挑戦することにより、練習の段階での助け合い、演奏後の一体感や達成感が生まれると考えられる。このように、エル・システマの活動では演奏する楽曲にもこだわりを見せていたため、作品に内

在する価値についても重要視していたといえる。相互行為としての音楽、コミュニティとしての音楽、質の高い作品に内在する媒介性、この三要素が掛け合わさることで、強い影響力を見せていたのである。

5−2. 新たな行為を呼び起こす力

“音楽によって人と人が繋がれる力”について前述したが、相互行為としての音楽、コミュニティとしての音楽の枠を超えた機能もあった。まず、もともと別で存在していたコミュニティ同士が繋がった例が、YOLA と相馬の交流である。4−2で述べたように、子供達にとっては貴重な海外交流の機会となり、音楽の力を再確認したり、文化の違いを知ったり、海外の子供達が心から“楽しそうに”演奏している姿をみて刺激を受けたりと、大きな意味をもったようだ。さらに、繋がったのちに新たな行動を生んだ例が、大槌のシニア向け音楽教室である。人を繋げるだけでなく、それがエネルギー源となって行動を呼び起こす力もあったのだ。“震災復興”という目的で設立されたが、音楽活動に参加する子供たちだけが直接音楽によって心を癒されるだけでなく、その活動そのものが周りに影響を及ぼしていて、復興のためのエネルギーとなっているのである。つまり音楽の媒介性は、コミュニティの内部にとどまらずそれ同士を繋げる可能性もある。さらにいえば、演奏している本人たちの間だけでなく、それを見たり教えたりしていた周囲の人々にまで及び、新たなコミュニティを生み出す可能性があるということである。

5−3. 自由な交流の場

さらに、菊川氏の述べていた「自由に交流できる場」という点も新たな機能である。エル・システマにルールはなく、習い事や部活のように参加への強制力もないため、毎回同じメンバーが集まるわけでもない。さらに同い年の子供だけでなく様々な年代のメンバーが集うため、参加する子供たちにとっては毎回違う発見があるだろう。これこそ媒介性の生かされた最たる例であり、その場で初めて出会った相手と音楽を通じてコミュニケーションを取っているのである。震災復興という目的で設立されたエル・システマジャパンだが、この点を切り取ってみると、震災の被害を受けた地方に限らずとも各地方に導入する価値があるかもしれない。

また菊川氏は今後の活動の展望として、ホワイトハンドコーラスについての取り組みを例として、参加できる枠を広げていきたいと述べていた。エル・システマはどんな子供を対象にしているのか、という問いに正しい答えはない。したがって、特定の子供にだけ適応するように作りこむよりも、参加できる対象を拡大すべくマイノリティの子供たちにも視野を広げてゆくことで、より普遍的な仕組みへの道が見えて来る。

6. 結論

本論文では、 音楽が子供に及ぼしうる影響力について探ってきた。まず先行研究をまとめ、音楽を「行為」と捉えるスモールの「ミュージッキング」理論、そして音楽療法における「コミュニティとしての音楽」の理論を紹介した。そして、対象を“同僚”などそのコミュニティに属する人々に限定した上で、音楽は様々な相互関係によって成り立っていて互いに影響を及ぼし合っている、さらに音楽そのものに内在する媒介性という力は行為によって引き出される、という仮説を立てた。その上で、エル・システマ、またエル・システマジャパンについての事例研究を行った。理論と一致していた点は、そうした活動がさまざまな相互関係の上で成り立っていることである。様々な年代の人々との交流を通じて自分のアイデンティティを確認する機能を持っていたり、ある時点では限定的だった関係も広がりを見せたりと、人々との関係があってこそ、音楽は様々な機能を発揮しうることが理解できた。さらに他のコミュニティとの繋がりや新たなコミュニティの誕生など更なる広がりの動きもあった。また、音楽作品そのものに内在する価値についても実際に重んじられていた。エル・システマの方針ではどんな初心者にも、練習曲ではなく質の高い交響曲などのレベルの音楽に触れさせることで意味があるとされていて、作品に内在する価値と行為によって得られる利益の両者が掛け合わされていることがひとつの重要な点となっていた。今後のエル・システマジャパンの展望としては、徐々に活動の拠点を増やしていることから、震災復興という枠を超えた、“子供達の自己実現”のための場作りへの転換が挙げられる。エル・システマは南米で生まれたが、やり方にルールも正解もない。これからも日本独自のエル・システマの形を確立し、展開される活動に注目したい。

本論文を執筆するにあたり、ご多用のところインタビューに快くご協力くださったエル・システマジャパン代表理事の菊川嬢氏に心より感謝申し上げたい。

＜参考文献一覧＞

・ 粟谷佳司『音楽空間の社会学　文化における「ユーザー」とは何か』青弓社、2008 年
・ 岩井光子『未来をはこぶオーケストラ　福島に奇跡を届けたエル・システマ』汐文社、2017 年
・ 国立音楽大学研究所音楽療法研究部門編著『音楽療法の現在』人間と歴史社、2007 年
・ 『潮　2017 年 4 月号』潮出版社、2017 年
・ クリストファー・スモール著、野沢豊一・西島千尋訳『ミュージッキング　音楽は行為である』水声社、2011 年
・ 小西潤子、仲万美子、志村哲編著『音楽文化学のすすめ　いま、ここにある音楽を理解するために』ナカニシヤ出版、2007 年
・ 小沼純一『オーケストラ再入門　シンフォニーから雅楽、ガムラン、YMO まで』平凡社、2012 年
・ トリシア・タンストール著、原賀真紀子訳『世界でいちばん貧しくて美しいオーケストラ』東洋経済新報社、2013 年
・中村美亜『音楽をひらく』水声社、2013 年
・ バレンボイム/サイード著、A.グゼリミアン編、中野真紀子訳『音楽と社会』みすず書房、2004 年
・ 毛利 嘉孝・中村 美亜・北條 知子編著『アフターミュージッキング　実践する音楽』東京藝術大学出版会、2017
・ 山田真一『貧困社会から生まれた奇跡の指揮者　グスターボ・ドゥダメルとベネズエラの挑戦』ヤマハミュージックメディア、2011 年
・ 山田真一『エル・システマ　音楽で貧困を救う南米ベネズエラの社会政策』教育評論社、2008 年
・ エル・システマジャパン　ホームページ　2017 年 7 月 31 日閲覧
＜http://www.elsistemajapan.org/＞
・ 慶應義塾大学 SFC 研究所「福島県相馬市における『音楽による生きる力をはぐくむ事業』に関する調査・分析・評価　～エル・システマジャパンの活動の社会的インパクト評価～」2017 年 3 月発行、2017 年 9 月 24 日閲覧＜
http://docs.wixstatic.com/ugd/efc3d0_3b1eb34a6f32468a935e18c702b48882.pdf＞
・ 才能教育研究会「スズキ・メソードとは」2017 年 7 月 31 日閲覧
＜http://www.suzukimethod.or.jp/about/native/＞
・ Institute Economics & Peace *Global Peace Index 2017,* 2017 年 7 月 31 日閲覧
＜http://visionofhumanity.org/app/uploads/2017/06/GPI17-Report.pdf＞
・ T japan 「聴こえなくても、音楽を共に創り、表現し、みんなで楽しむ」2017 年　2017 年 12 月 22 日閲覧
＜https://www.tjapan.jp/ART/white-hand-chorus-17＞